

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成24年 5月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科 地域環境科学専攻

職名・学年 博士課程5年

氏 名 近 藤 友 大

助成の種類	平成24年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	(和文) 第7回果樹の無機栄養に関する国際シンポジウム (英文) The VII International Symposium on Mineral Nutrition of Fruit Crops		
発表題目	(和文) カリウム施肥がパッションフルーツの酸含量におよぼす影響 (英文) Acidity of Passion Fruit as Affected by Potassium Fertilizer		
開催場所	タイ王国 チャンタブリ県		
渡航期間	平成24年 5月19日 ～ 平成24年 5月25日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円	
	使用した助成金額	150,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	交通費の一部	74,000円
		シンポジウム登録費	28,000円
宿泊費		48,000円	
当財団の助成について	貴財団の助成は、助成金の手続きや振込み口座の提出の方法なども非常に簡単で、分かりやすかった点が非常に有難かった。また多様な状況に対応できるシステムになっていると感じた。特に不満な点や、改善すべき点はなかったように感じる。		

成果の概要／近藤友大

京都大学財団の助成によって 5 月 19 日から 25 日の日程で The VII International Symposium on Mineral Nutrition of Fruit Crops に参加させて頂きました。このシンポジウムで得られた成果についての報告をいたします。

シンポジウムのプログラムは、研究発表と現地農園の視察などのツアーの 2 つに分けられる。研究発表は 22、23、25 日におこなわれ、口頭発表 33 課題、ポスター発表 40 課題の計 73 課題の発表がおこなわれた。発表会場は 1 箇所であったため、全てのセッションに参加することが可能であった。Topics が限定的であるために、参加者の関心欲が非常に高く、大多数の人が全てのセッションに参加していたようであった。参加者は 350 人程度であったが、大学の関係者だけでなく、肥料会社の関係者や、現地農園主も参加していた。参加者の顔ぶれが多彩であり、多様なモノの見方があったため、活発な議論がおこなわれた。

私は、カリウム施肥がパッションフルーツの酸含量におよぼす影響というタイトルでポスター発表をおこなった。他の果樹でのカリウム施肥の方法や今後さらに分析すべき点についてのアドバイスや意見交換がおこなえた。パッションフルーツと同様に酸の高いサラッカという果樹を栽培している現地農園主が、非常に高い関心を示してくれた。サラッカの酸含量を低下させる為に、サラッカでも同様の研究をして欲しいといわれたことは非常に嬉しいことであった。

他の研究発表はとても勉強になった。特に今回のシンポジウムでは果実品質とカルシウムに関する課題に注目が集まっていた。私はこれまでにマンゴスチンの果実品質に及ぼすカルシウムの影響に関する実験をおこなってきた。マンゴスチンやその他の果樹でのカルシウム欠乏に関する様々な知見を得ることができ、また多くの情報を交換することが出来た。今後の研究に関するヒントをたくさん得ることができた。

国際シンポジウムということで、国内の学会では聞くことのできないような環境での果樹栽培の報告を多数聞いたことも私にとっては非常に新鮮であった。私はこれまでに熱帯での果樹栽培に関する研究をおこなってきた。熱帯では降雨量が非常に多く、土壌は一般に酸性で、無機養分に乏しい。また日本国内でも無機養分は十分にあるものの、降雨量は多く、酸性土壌である。しかし、果樹栽培は、降雨量が少なく土壌がアルカリ性である土地でもおこなわれている。教科書では知っていた知識であるが、研究発表を聞き、写真を見て、彼らがどのような問題点を克服しようとしているか知ることで、果樹研究に関する視野が広がったと感じる。熱帯や日本とはまったく違う環境で、異なる果樹や、たとえ同じ果樹であってもまったく違う方法で栽培していることを、改めて実感させられた。多様な自然環境があり、それぞれの環境に適した作物や栽培方法を模索していく、農学者として当たり前のことで、これまでも分かっているつもりであったが、

それを改めて気付けたことは非常に有難かったと感じている。

ツアーでは高畝栽培でココヤシやライチを栽培している農家の視察をおこなった。熱帯の低地には非常に水はけが悪く、見渡す限りドロというような環境が存在する。視察をおこなった地域も一面の塩田があるような地域である。また少し海に近づくと、見渡す限りのマングローブ林が広がっている。海に出てみると、目の届く範囲はずべてドロの海が広がっているという、そのような環境の地域である。果樹は一般に水はけのよい土地を選ぶので、このような環境で果樹栽培がおこなわれていることを、にわかには信じがたかった。しかし確かに果樹園はそこにあった。高さ 1.5m 程度の畝を立てて、その上で果樹を栽培する。畝間は水が溜まった状態である。重機を用いて畝立てするため、初期投資は非常に大きい、土地が肥えているので収益はいいらしい。またライチは一般には熱帯の低地では気温が高すぎるため栽培できないが、この土地では特異的に栽培できるらしい。この特殊な環境によるものであると思われるが詳しいことは分かっていない。このような特殊な栽培環境を目の当たりに出来たことは得難い経験であった。

またマンゴスチン農家、サラッカ農家、ロンガン農家の視察もおこなった。彼らは非常に研究熱心な農家で、栽培方法の改良に関する関心も高い。日本や欧米などの先進的な栽培方法に興味があり、それらの方法をどのように熱帯果樹に適応しようかと模索していた。彼らの中には今回のシンポジウムに参加している人もおり、興味の高さが伺える。農学に携わるものとして、彼らに貢献していきたいと感じた。

最後になりましたが、このような刺激的なシンポジウムに参加する機会を与えてくださった、京都大学財団に感謝いたします。単純に学問的な知見のみではなく、農学者としての視野が広がったことや、海外の研究者との交流、農園主との交流が出来たことは得難い経験です。本当にありがとうございました。